

2025 年 6 月 3 日

2025 年度申請第 16 回心血管カテーテル治療専門医筆記試験を終えて

専門医認定医制度審議会
筆記試験運用小委員会 委員長 菅野晃靖

2025 年度申請第 16 回 CVIT 専門医試験は、2025 年 4 月 27 日、引き続きの感染対策と受験者の利便性をふまえ、ここ数年の分散会場方式を踏襲し、支部ごとに実施した。

本年も昨年同様、「一般問題」110 分、間に約 20 分の休憩をはさみ、「臨床的内容を中心とする問題」75 分とし、13 時には終了することとした。

本年の試験実施に際しても、本来業務である循環器疾患診療を遂行され、ご多忙を極める中、受験の準備を行ってこられた受験者の先生方、試験監督の役務を担って頂いた先生方には、心より感謝申し上げます。

本年の受験者数は 175 名、欠席はなく、合格 173 名、不合格 2 名、合格率は 98.9%となり、例年どおり極めて高い合格率となった。

第 16 回専門医筆記試験の採点を終えて、受験者の理解・知識が不十分であった点などを整理し、指摘したい。

1. 例年どおり、高い出題予想であったと思われる最新の日本循環器学会ガイドラインの内容について複数出題があったが、残念ながら決して正答率が高いとは言えない結果であった。ACS、CCS それぞれについて、PCI と CABG による血行再建の適応・推奨クラスは当然ながら、診断プロセスや治療戦略決定因子に関しても、今一度、正確な知識の習得に努めて頂きたい。さらに ARC のみならず本邦の高出血リスク（HBR）基準や SYNTAX score II など各種スコアの内容、ステント血栓症のリスク因子などについても、日本循環器学会ガイドラインの内容を復習して頂きたい。
2. 施設基準の変更によりロータブレーターの実施が可能となった施設が増加しているが、そのような状況の中で、ロータブレーターの使用禁忌とされる病変についての知識は最重要と思われるものの、正解率が高くなかった。是非、再確認をして頂きたい。
3. インターベンション必携にもない内容ではあったが、IVL の実施施設も急速に拡大しているため、今回初めて出題した。最も重要な IVL の適応についての問題も正解率が高くなく、正確な知識を欠いていることが判明したので、再確認して頂きたい。
4. 実臨床での PCI に直結する知識として、冠動脈分岐部病変に対する PCI（特に POT に関する正確な理解）や、CTO に対する PCI（特に側副血行路についての知識）に関する問題も、十分な正解率ではなく残念であった。
5. PCI 実施時に併用することが多いイメージングに関する問題では、IVUS による画像診断に関するものは正解率が高かったが、OCT 画像についての読影力を問う問題では正解率が低く、今後十分な学

習をお願いしたい。

6. 日常臨床の中で冠動脈疾患の画像診断としてすでに普及している冠動脈 CT の所見についての知識も十分とは言えなかった。
7. 冠動脈以外のインターベンション治療に関する問題も、例年、指摘があるとおりの正解率が低めであった。CVIT 専門医として必要な心血管インターベンション全体の基本的知識を備えられるように、日頃実施していない手技やあまり診療に携わることがない疾患についても、研修のカリキュラムに基づき、「インターベンション必携」を中心に最新の情報も収集しつつ、日頃からの学習を行なって頂きたい。
8. 本年、AMI 後の着用型自動除細動器 (WCD) 適応に関する問題について正解率は低かった。日常臨床の中でも使用される機会が増加しているため、知識を確認する必要があると思われた。
9. 放射線被曝・防護に関する知識は PCI 術者にとって極めて重要である。日頃から放射線被曝の低減に努めるためにも、皮膚放射線量と組織反応・障害について正確な知識が必要であるが、それに関する問題の正解率も低く、改めての学習が必要と思われた。
10. J-PCI レジストリーに関連する問題も例年出題されているが、今回も正解率は高くなかった。自施設が行なった PCI について、治療成績をフィードバックすることは重要であり、そのためにも毎年発出される J-PCI レジストリー年次報告や、関連論文に目を通し、本邦全体における PCI の動向にも目を向けておいて頂きたい。
11. 今回の筆記試験全体の結果は平均点 (平均正解率) が 73.3% であり、例年とあまり変わらない数字であった。正解率の低い問題カテゴリーはやはり例年通りの傾向があるので、上記の講評の内容を踏まえ、今一度、「インターベンション必携」を中心に基本的事項を学習し、さらに年々更新される各種ガイドラインの内容や、インターベンション治療に関する新たな知見を最新のもののアップデートしつつ、CVIT 専門医として必要かつ十分な知識の習得を目指して頂きたい。

以上